

共に生きるために



2020年度事業報告書 April 1, 2020 - March 31, 2021



共に生きるために 2020年度 事業報告書



農村指導者を育てる

- 02 新たな研修を見出して
- 04 危機ではなくチャンスとして
研究科生報告
- 05 Participant Story
学びの核心を掴む学生
- 24 カリキュラム一覧



アジア学院のフードライフ

- 06 コロナの中でも
「自分たちの食べ物」を
- 07 みんなの食育の場
- 07 Key Concept
自然の循環に生かされて
- 08 豚伝染病対策と山羊肉の利用



オープンラーニング・プログラム

- 12 “密”を解く
- 14 アジア学院ウェビナー



サポーターと共に

- 16 届いています！皆さまの想い
- 17 「新しい日常」でも日々の貢献に
尽力くださったボランティアの皆さま
- 18 海外からの途切れることのないサポート



卒業生とのつながり

- 20 新型コロナウイルス感染症と
世界の卒業生
- 21 Graduate Story
卒業生からのメッセージ



その他

- 09 退職のごあいさつ
- 10 共に生きる... 2メートル離れて！
- 13 ラビリンス完成
- 14 ホームページリニューアル
- 14 SNSでアジア学院をより身近に
- 15 フードライフをご自宅で
- 19 Snapshots
- 22 会計報告
- 25 コミュニティメンバー一覧

目次



学校法人
アジア学院

表紙イラスト 中山 紀子、渡邊 桃子
© 2021年 学校法人アジア学院

ご挨拶

2020年度の研修は、新型コロナウイルスの感染拡大による各国の都市封鎖や国境封鎖と重なり異例のスタートとなりました。しかし11名（海外から8名、日本人3名）の学生を迎え、無事に最後まで研修事業を遂行することができました。世界中が様々な危機に直面する中、アジア学院においてもコロナ禍の中の研修という初めての試みでしたが、幸いにも栃木県北部は感染拡大が比較的抑えられてきたので、私たちは共同体生活を維持しながら、アジア学院が大切にしている価値観を損なうことなく、むしろそれらの価値観の重要性を再認識しながら1年を過ごすことができました。その数々の恵みと、学びを支えてくださった多くの支援者の皆様から感謝申し上げます。

コロナ禍の中の研修で得た多くの学びの中でも特に大きかったことは、人間は多くの制約の中でも新しい環境に順応できるという事実です。それは人類の歴史がすでに明らかにしてきたことでもあります。今回人類が順応を迫られた「新しい状況」は短期間のうちに世界中に突然やってきました。そしてその状態が1年以上続いています。私たちの「順応」には痛み、苦しみ、悲しみ、そして多くの犠牲を伴いますが、順応の過程で人間が変容していく様子を自ら体験することで、その過程においてその経験は希望をも生み出すことを感じています。この希望は個人に留まらずに、他者と共有されたときにより大きな喜びに変わることも重要な学びでした。

このことは海外の卒業生の活動にも表れていました。多くの卒業生がそれぞれの国の地域で仲間と共に知恵を出し合い、工夫を凝らし、お金を集め、コロナ禍において急増した社会的弱者のためにより一層活発に活動を展開していました。希望を得た私たちは次の世代のためにも動きを止めてはならない、むしろより一層精力的に働いていかねばならないと思っています。

またコロナ禍において私たちはコミュニティのもつ力を改めて認識しました。アジア学院はもともとコミュニティを基盤にした学びを大切にしてきましたが、危機的な状況の中でこそ、人間が孤独にならずに、助け合い、相談し合い、支え合うことのできる仲間がいることは、私たちが進むべき道を見失わずに歩む上で最大の力となりました。10年前の東日本大震災の時にも感じましたが、先の見えない不安、得体のしれない恐怖を分かち合い、共に危機を乗り越えようとする仲間がいることで、ひとりでは弱く脆い人間が、余裕を持ち直し、未来について考えることができ、レジリエンス（復元力、回復力、柔軟性）を高めることができることを私たちは実感することができました。これらのことをこの事業報告書の中でご報告させていただきたいと思います。

皆様の上に神様の豊かな祝福が注がれますようにお祈りいたします。



星野 正興
理事長



荒川 朋子
校長

農村指導者を育てる



埼玉県小川町の有機農家を訪ねて

新たな研修を見出して

2020年度農村指導者研修プログラム報告

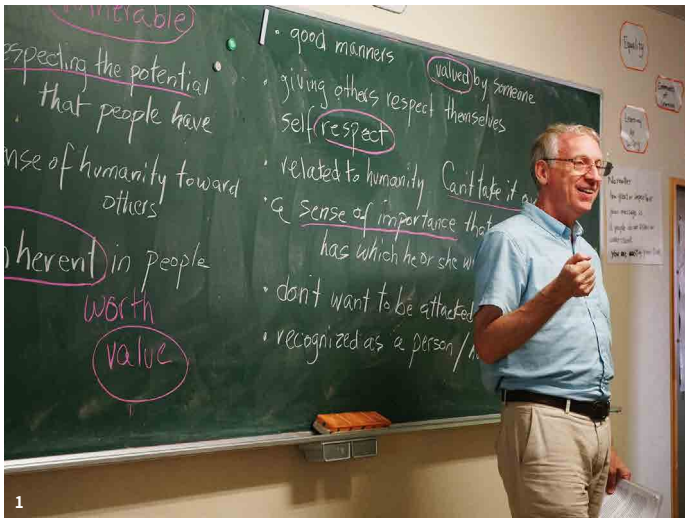


大柳 由紀子
副校長・教務主任

2020年度は新型コロナウイルス感染症流行により、全てにおいて例年とは異なる研修となりました。3月末から4月にかけて各国で始まった都市・国境封鎖や日本政府のビザ失効措置などにより、入学予定者のうち19名が来日を断念せざるを得ず、結果として本科生10名（日本人2名を含む）と研究科生1名のみとなり、これは例年の半分から3分の1という少なさでした。研修も例年通りとはいかず、首都圏でのホームステイは中止、埼玉での宿泊を伴う研修は日帰りに、学校や幼稚園との交流も次々と中止となりました。農村地域研修旅行は東北地方に行けなくなり、西日本研修旅行も都市部や学校、福祉施設は避けざるを得ませんでした。そんな中で「それならばいつもは出来ないことをやろう」と前向きにとらえ、いくつかのあらたな研修を取り入れた9か月となりました。

「次善」ではなく、異なる「最善」を

座学では農村リーダーとして必要な様々な知識を学びますが、基本的に例年と遜色ない授業を実施することができました。感染拡大時には首都圏から外部講師を招くことを避けざるを得なくなりましたが、講師の方とオンラインでつなぐことで乗り切ることができました。学生たちは教室でオンライン講義を受け、サポートにあたる職員がディスカッションをフォローしていきます。この形式により「コミュニティに共に住み、互いから学びあう」学びの共同体を維持しつつ、遠隔の講師ともつなぐことが可能となりました。学院が今までできなかった、新たな可能性に気付くことができました。こういったオンライン授業では、東京や大阪、山形、さらにはインドネシアともつないで、新たな学びの道が開かれていきました。



(1) 「尊厳」についての授業を行うゲスト講師 (2) 地元のマルシェを見学
(3) 耕運機にチャレンジ (4) 麦わら集め

学生の人数が少なかったため、グループ制によるリーダーシップのローテーションは、いつもよりも多く機会が回ってきました。交流プログラムが減った分、その時間を使って内部でのディスカッションの機会も増えました。「開発とは何か」「エンパワーメントとは何か」「お金とはどういう存在か」。学生たちは普段何気なく使っている言葉の芯にある意味について、考えを深めていきました。

地元を目標とした地域研修

夏の農村地域研修旅行は東北地方に行けない分、地元を目標としようと栃木県内の日帰り研修を増やしました。有機農家、コンポストセンター、農家レストラン、地元のマルシェ、森を利用した牧場などを訪問し、ソーシャルビジネスや有機農産物市場の新たな学びの可能性に出会うこととなりました。マーケティングを学びたいと言っ

ていた学生も、リサイクルに興味を示していた学生も、「今年だから行けたのだとすれば、僕は今年の学生でラッキーだった」と述べています。

アジア学院の学生たち

アジア学院に来る学生たちの背景は様々です。地域の女性グループと共にコミュニティに働きかける人、農業と家畜飼育プログラムによる農民の収入向上に努める人、子どもたちの教育を通して地域のより良い未来を目指す人、長年にわたり農家として働きつつ地域の環境向上のために1万本を超える木を植え続けてきた人、銀行勤めを辞めて有機農業を実践する共同体に飛び込んだ人…。彼ら全てにとって益となる学び、それこそが「農村リーダーとしての自己変革」であると私たちは考えています。

学生のニーズにこたえるべくカリキュラムをデザインしながらも、いつしか私たち

は新たな挑戦を避けていたのかもしれませんが。コロナ禍という、私たちには変えられない状況が、学生たちの高い研修意欲に支えられ、アジア学院の新たな学びの可能性を開いてくれました。学院のカリキュラムとSDGs（持続可能な開発目標）との結びつきも、さらにはっきりとしてきました。世界中で続くパンデミックに不安はあるものの、だからこそ学生たちは自らの学びに責任をもち、この機会を逃さずに学ぶことに貪欲ですらありました。期待以上の自己変容を遂げ、自国へと戻っていった学生たちは、次は地域の人々の変革へと取り組み始めています。



危機ではなく チャンスとして

ガーナにおける短期特別研修



大柳 由紀子
副校長・教務主任



「ガ」ーナが国境を閉じた。シエラレオネの学生4人が取り残された」という知らせがアジア学院に飛び込んできたのは、2020年度の学生たちが来日し始めた3月末の事でした。海外からの学生は、自国にある日本大使館でビザの発給を受けてから来日しますが、シエラレオネには日本大使館がないため、隣国ガーナの日本大使館が業務を兼務しています。そのためシエラレオネの学生はまずガーナに行き、そこで手続きをしてから来日するのが例年の

習わしです。ところが今年はコロナの影響で学生4名がガーナに移動した矢先にシエラレオネが国境を閉鎖、その後彼らが日本に向かう前にガーナ自体が国境を閉じて移動ができなくなったのです。学院職員はガーナの卒業生に支援を求めました。すぐに2018年度卒業生のジョン・イエボアが「それならば、僕の所に」と手をあげてくれました。卒業生の所に置いてもらえれば…。私たちはそう考えましたが、ジョンはすでにその先を見据えていました。彼は4

名に短期研修を開始したのです。

野菜作物の栽培（栽培法、苗管理と定植、除草）、有機農業実習授業（ぼかし肥、堆肥、地域資源を利用した農業資材）、プレゼンテーション技術、見学研修、リーダーシップ技術などなど。中間発表はオンラインでアジア学院とつなぎ、こちらで発表を聞くこともできました。発表の最初に日本語であいさつと自己紹介までしてきたのには驚かされました。

結局彼ら4人は8月末まで研修を受け、

2020年度研究科生 プログラム報告



眞木 凌

ア ジア・アフリカから来る学生と野菜栽培や養豚を通して、日々意見交換をしながら学びを深めた1年でした。前半は野菜部門に所属し、研究科生用の畑・田圃を各200㎡用いて、2019年度学生時に学んだことの実践を行いました。畑では、稲藁、炭、落ち葉など様々な有機物を敷材として栽培する野菜に使用することで、生物の多様性による病害や食害の阻止や土壌の向上に取り組みました。田圃では水の少ない農村部を想定した、水を最小限に留め、一本植えをするSRI (System of Rice Intensification) 法を用いた稲作の実践を行いました。また後半は養豚部門に所属し、2021年3月から職員として養豚部門を担当する準備として、養豚技術・知識を前任



者から引き継ぐと共に、猛威を奮っている豚熱対策に力を注ぎました。長靴の履き替えの徹底、踏み込み消毒槽の増設、豚熱に関しての情報共有板等を作成しました。また、作業の見落としを防ぐための作業後のチェックリスト、母豚の過去の出産記録や次の発情等を記録した用紙を作成しました。



ガーナでの研修を終えたシエラレオネ人4名と協力者
左から4番目の男性が卒業生のジョン・イエボア

9月中旬ようやく自国に帰ることができましたが、彼らにとってこの研修は大変有意義なものとなったようです。何よりもこうした研修を実施することができた、卒業生のジョン・イエボアを私たちは誇りに思っています。

ガーナにおけるシエラレオネ人4名に対する特別研修は、カナダ合同教会及びアメリカ福音ルーテル教会が財政支援をしてくださいました。

ガーナ特別研修卒業生 (上写真)

- (1) ソング・ナビヨ Songu Philip Nabieu
(New Life Ministries International)
- (2) タキヨ・アマラ Takieu Amara
(Sierra Leone Correctional Service)
- (3) マグヌス・ムサ Magnus Foray Musa
(Ndegbornei Development Organization)
- (4) ジョン・タッカー John Tucker
(The Methodist Church Sierra Leone-Relief and Development Agency)

PARTICIPANT STORY

学びの核心を掴む学生

オーガスティヌス・アディル
ムバタ聖テレサ教区教会(インドネシア)

“Me, English, little little. Farmer, no understanding only talking, practical, very important” (私、英語、少し。農家、話すだけ、理解しない、実践、とても大切)

オーガスティヌス・アディル、通称アグス。生粋の農民で、子供時代の学校教育は途中で断念。しかし地域の篤農家として周りからもリーダーとみなされている。自分の農場だけでなく、地域のことを考え続けていた彼は「水資源を確保していくためには、森林が必要だ」と木を植え始めた。それがいつしか1万数千本にまでなったとき、地域には川が現れたという、まるで絵本の主人公のような経歴を持っている。収入源としてコンニャク芋の栽培を始め、村の他の農民にも勧めているという。

そんなアグスがアジア学院にやってきた。アジア学院の共通語は英語。インドネシアの中でも開発から取り残されているといわれる小スンダ列島フローレス島の農民であるアグスが、英語に触れる機会が今までであったとは思えない。アジア学院に応募してから、神父やシスターから学んだものの、学院到着時にはほとんど英語を理解できなかった。少し困った顔をしながら、片言の英語を紡ぐアグス。グーグル翻訳を使いながら、ハンドアウトをインドネシア語



にしていく職員。そしてじっくりと話を聞く、クラスメートたち。いつしかアグスの言いたいことを、周りは理解していくようになった。ルームメートのガーナ人になつては、同じ切れ切れの英語を駆使するまでになる。アジア学院は不思議なところだ。言葉ではなく、心で通じているのかもしれない、と思わせるような場面に何度も遭遇した。レポートや小論文では苦労したが、アグスが大切な「学びの核心」を掴んでいくのが、周りにも分かった。

最終発表、アグスは前を見据えながら、英語で自分の夢を語った。「帰ったら地域の行政も巻き込んで、有機農業を伝えていくんだ」 そんなはにかんだ笑顔が忘れられない。

(大柳由紀子 副校長・教務主任)

追悼

NPO 法人民間稲作研究所 稲葉光圀理事長 (2020年12月逝去)



「稲作のことでわからないことがあれば、稲葉先生に聞け。」これは私が農場を担当していた20年近く前に言われた言葉です。農場職員のみならず、2012年からは学生たちも毎年見学研修として、稲作、油脂作物、農業害について教えていただきました。「生物多様性を育む農業国際会議」での職員や研究科生の発表、ブータンでのプロジェクトでの卒業生の参加など、多岐にわたる学びをいただいた先生の想いを、私たちもつないでいきます。

(大柳由紀子 副校長・教務主任)

アジア学院の フードライフ



コロナの中でも 「自分たちの 食べもの」を

野菜・作物部門報告



櫻井 将伸

フードライフ課（野菜・作物）

2020年度 主な農作物の生産量

米	5,556 kg
小麦	3,026 kg
じゃがいも	2,474 kg
さつまいも	664 kg
大豆	2,113 kg
にんじん	1,545 kg
かぼちゃ	219.5 kg
たまねぎ	2,044 kg
エゴマ	43 kg
キウイ	43 kg
ブルーベリー	37 kg

アジア学院の野菜栽培は毎年3月初旬からはじまります。竹と稲わらで作った枠組みの中に落葉を入れ、水をかけながら足で踏み込んで「温床」をつくり、微生物の作用によって落葉が発酵する際に出てくる熱を利用することで、早春からの苗作りが可能となるのです。発芽適温がそれほど高くない野菜、レタスやキャベツ、セロリなどの種まきから始まり、育苗期間の長いナスの播種が次に続きます。その後、3月下旬から4月上旬にかけてトマトやキュウリ、ニガウリなど夏野菜の種まきをします。外の畑でジャガイモの植え付けをするのもこの時期です。

2020年度も通常の栽培暦に従って播種・育苗作業を進めていきましたが、新型コロナウイルス感染症の影響で、4月の段階で今年度の学生が全員で11名となることが判明しました。何がどうなっていくのか全く不透明なままではありましたが、「自分たちの食べるものは自分たちでつくりたい」という想いのもと、いつも通りに野菜・作物の栽培を続けていきました。

学生数が少ないかわりに多くのボランティアが集まった2020年度は、ジャガイモとタマネギでそれぞれ2000kgを超える収量を得ることができました。ニンジンでも1500kg以上の収穫ができ、約3000本

のニンジンジュースを生産することができました。また、米を育てた田んぼの一部には50羽の合鴨を放ち、雑草抑制に大きな成果を上げることができました。

反面、カボチャの総収量が下がりました。これは水はけの良くない畑にカボチャを植え付けたことが原因です。ビニールハウス内で栽培したトマトも思うように収量が上がりませんでした。同じ場所で同じ野菜を栽培したことによって引き起こされる「連作障害」が原因だと思われます。微生物を施用した土壌改良により、ある程度の連作は可能となるかもしれませんが、やはりトマトやナス、ジャガイモなどのナス科の野菜は毎年場所を変えて「輪作」することが基本的な栽培技術となります。

今年度も多くのことを土に学びました。毎日田畑に出て行って観察を怠らず、昨日とさほど変わらない状況の中に生まれているわずかな変化を見逃さない目を養うことができれば、おいしい野菜がたくさん穫れると思うのです。



KEY CONCEPT

自然の循環に 生かされて

原発事故と新型コロナウイルス感染症拡大は、どちらも右肩上がりの成長を前提とする資本主義のあり方の限界を示しているという点で共通している。原発は核廃棄物も放射能も科学が進めば処理できるようになるに違いないという科学信仰により前に進められてきたし、開発を推し進めた人間が自然界の奥深くまで侵入したことが新型コロナウイルスに人間への感染の機会を与えたのかもしれない。いずれにせよ、あらゆる分野で利便性や効率性が最優先され、経済は成長の限界に達しつつあり、環境はその負荷に耐えられなくなってきている。この持続可能ではないあり方は波状しつつある。今年、インドやアフリカでバッタの大

発生が起こったように、さらに世界規模の新たな問題が次々と起こる可能性がある。

そこで、災害に強い、持続可能なライフスタイルとはなんであろうかと考えてみた。一つの答えが循環である。自然の生態系は絶妙なバランスと循環の上に成り立っている。食物連鎖では、植物を動物が食べて、その死骸や残渣である有機物を微生物が分解し、植物がその分解物を吸収する。循環している。人間だけがこの循環に従おうとしていない。

経済においてもお金は循環していない。富めるものは益々富み、貧しいものは益々貧しくなって、そのギャップが益々拡大している。

学院のフードライフは循環を大切にしている。自給を目指して働いてきたお陰で、常に60名のコミュニティメンバーが一年食べていけるだけのお米が常に貯蔵されて

いて、野菜、卵、肉も年中手に入る。このフードライフは地震や原発事故、新型コロナウイルス感染症拡大の危機の時にも、当面は生きていけるという最低限の安心を与えてくれている。余剰米をコロナ下で苦しむ人々への寄付としても活用できたことは、大きな喜びである。飼料の自給など、まだまだ課題は多いが、日々、気候変動や災害に強い農業やライフスタイルを模索している。持続可能なライフスタイルを共に体験しながら学べる場を、人々に提供できたらと願う。



荒川 治
副校長・フードライフ課長（農場長）

みんなの食育の場

FEAST（給食）部門報告



金森 郁美
フードライフ課（FEAST）



ステイホームの波はアジア学院の人々をキッチンへ向かわせたようでした。普段から日々の食事作りだけでなく、朝食のパンや行事のためのお菓子、旬の果物や野菜を加工したピクルスなど、自分たちの食べるものを手作りしていますが、それが一層盛んに行われた2020年でした。

学生、ボランティア、職員と多くの人が料理や食品加工に興味を持ち、自分の空き時間を利用してキッチンに入り、天然酵母のパンや大豆の加工品、さつまいものお菓子などおいしいもの作りに取り組みました。

手塩にかけておいしいものを作る行為は、自分でも作れるんだという気付きと自信を個人にもたらしました。また、誰が作ったのが話題になり、作ってみたい人が現れ次は一緒に作ってみる、といった自然な学び合いのサイクルが生まれました。キッチンはFEAST部門がねらいとするFood Education=食育の実践の場と

なりました。

また当初の予定より小さくなったコミュニティには十分すぎる農産物を有効に活用できるよう、農場や販売部門とのこまめな連絡調整を心がけました。キッチンではそれぞれ異なる食文化を持つメンバーが料理をすることで、一つの食材から様々な味を楽しむことができました。そのようにして、自分たちで育て収穫し料理し分かち合うという実践、Sustainable Table=持続可能な食卓を囲むことができました。

決して豪華ではないけれど、安全でおいしくて栄養豊富な食べものを毎日食べることができる。分け合うことができる。そんなシンプルな日々の積み重ねが、この不安な一年を皆が元気に過ごすことに貢献できたのではないかと思います。

豚伝染病対策と 山羊肉の利用

畜産部門報告



大谷 崇
フードライフ課（畜産）



異常発生した家畜伝染病に振り回される一年となりました。豚の伝染病、豚熱は9月に近隣にも侵入、それと前後して様々な法律が厳格化されたことに伴い、給食残渣の米飯の受入停止や、豚に使用していたパンを鶏に振り替えざるを得なくなりました。予防的ワクチン接種が開始され、防鳥ネット・防護柵の設置、豚舎専用の長靴や前掛けの導入などの対策を実施しました。一方、鶏の伝染病、鳥インフルエンザも秋から猛威を振るっており各種対策を講じました。

各部門の取り組み

養鶏部門では産卵鶏とブロイラーを育成し、卵と肉の安定的な供給に貢献しました。特にブロイラーはワクチンを使用せず、学内で生産された農作物と音楽を活用した完全有機に挑戦しました。

山羊部門では農場内の畔草を最大限活用して育成し、屠畜して山羊肉を供給することができました。

養豚部門では記録的に多くの仔豚が生まれました。しかし夏の猛暑で複数の母豚を失ったのははじめ、多くの仔豚が母豚による圧死や生育未熟のために死亡するという残念な結果になり、改善を模索しています。

担当職員の交代

これまで養豚部門を担当していたフィリピンの卒業生でもあるギルバート・ホガング職員が3月をもって退職し、2020年度研究科生の眞木凌が3月から職員として引き継ぎました。

養魚部門の休止について

研修の中で実施してきた養魚（養鯉）を休止することとしました。学生はティラピアなど熱帯魚への関心は高いものの、鯉のような温水魚の日常管理には関心が向かない状況が続いていました。また鯉は収穫までに時間がかかるだけでなく、毎年漏水するなど施設の維持管理にも時間を要しました。その一方でアフリカの学生を中心に、養蜂への関心が急速に高まっています。ここ数年、日本ミツバチに取り組み始めていましたが、今後は養鯉に代わり、養蜂の充実を通じて研修の質の向上に努めたいと考えています。もちろん既存の池やラムポンプ、雨水利用システム、その周囲の果樹園は複合的水辺空間として研修の中で今後も活用していきたいと考えています。



2020年度 主な畜産物の生産量

養豚：	肉	71 頭
鶏：	たまご	99,664 個
	肉	411 羽
山羊：	ミルク	1,768.9 ℓ
	肉	52.2 kg
	内臓	16.0 kg
養魚：	魚	26.5 kg

退職のごあいさつ



ザチボル・ラコー・ドーゾ

インド・ナガランド出身、2000年度卒業生、2009年度研究科生
2010年度、2012-2019年度フードライフ課・FEAST（給食）担当職員

2020年、私は職員としての役目を終え、帰国準備中にコロナ禍に見舞われ、帰国を延期せざるを得なくなりました。自分に何が起きているのかほとんど理解もできず、眠れない夜を過ごしました。精神面、健康面、経済面、あらゆる面で人生最大の試練に直面した年でした。しかし、それはアジア学院の使命にも記されているキリストの愛を学ぶための試練でもあったのだと思います。「イエス・キリストの愛に基づき…」コミュニティに暮らし、コミュニティのメンバーと共に生きる。日々の生活の中で、たくさんの人が私を励まし、一緒に祈ってくれました。食べ物をくれたり、経済的に支援してくれる方々さえありました。

私は学生として、研究科生として、そして職員としてアジア学院で長い年月を過ごし、すでに多くのことを学んだつもりでしたが、この9か月間ほど多くのことを学んだ年はありませんでした。コロナ禍による混乱は、私がアジア学院で10数年間学んだことより深い意味に気づき感謝する機会を与えてくれたように思います。

私を励ましてくださった多くの方々に、この場をお借りしてお礼を申し上げます。

「わたしの兄弟たち、自分は信仰を持っていると言う者がいても、行いが伴わなければ、何の役に立つでしょうか。そのような信仰が、彼を救うことができるでしょうか。もし、兄弟あるいは姉妹が、着る物もなく、その日の食べ物にも事欠いているとき、あなたがたのだけれど、彼らに、『安心して行きなさい。温まりなさい。満腹するまで食べなさい』と言うだけで、体に必要なものを何一つ与えないなら、何の役に立つでしょう。信仰もこれと同じです。行いが伴わないなら、信仰はそれだけでは死んだものです。」（ヤコブの手紙2章14-17節）

神さまが皆様を祝福してくださいますように。私たちは皆、愛と思いやりが行動によって示される、アジア学院のような場所を必要としています。私は故郷に戻った後も、草の根の人々と共に生きることに、これまで以上にかかわっていきたく思います。



ギルバート・ホガング

フィリピン出身、2004年度卒業生
2008-2020年度フードライフ課・畜産担当職員

私は2004年度の卒業生です。フィリピンにある小さなコミュニティベースの協同組合が送り出し団体で、アジア学院卒業後もそこで働いていましたが、2008年にアジア学院の職員として招聘され、2021年3月に退職するまで家畜（豚と牛）部門を担当しました。獣医として、そして農民として、学んだことを活かせることにとても心を動かされました。

当初の課題は、授業を組み立て、また学生とすべてのコミュニティメンバーに私の知識と経験を共有することでした。授業の受講者は、学院の学生以外にも青年海外協力隊の研修生、大学生や高校生、学院内プログラム参加者と幅広く、キャンパス外やオンラインで講演を行うこともありました。

着任当初は、畜産部門は輸入飼料を購入して豚や牛を肥育していて、学生たちの国や地域で応用できるのか、代替可能な家畜飼料原料はあるのかと疑問に思いました。さらに放射能や家畜伝染病への対応など、常に課題がありました。

これらの課題に対処するため、学生が理解しやすいよう、トピックごとに講義内容を改訂・整理し、独自の家畜管理の授業のシラバスを作成、日本で入手可能な資料を集めました。また飼料の栄養成分を計算し、おからはじめ地元の資源を用いて発酵飼料を作りました。結果的に、餌の自給率は約50%となり、市販飼料のみを給餌している豚と同等もしくはそれ以上の肉質を得ることができました。

働くことそのものが、自分自身にとって継続的な学びの機会でした。学生たちと共に働き生活する中で、私の知識と経験はさらに豊かになりました。学生の多くは、それぞれの国に戻った後、この学びを活かし豚を飼育しています。アジア学院の研修プログラムに全身全霊を捧げた12年間で、世界中の卒業生を通して結実していることをとても嬉しく思います。





COMMUNITY

共に生きる... 2メートル離れて！

アジア学院の3密防止策と コロナウイルス感染予防対策



メレディス・ホフマン
共同体生活

- (1) 朝の集いは屋外で実施。一定の距離を保つ
- (2) 透明パーティションが設置された食堂
- (3) 屋外で昼食を楽しむ学生とボランティア
- (4) 日本文化デーで書道を体験する学生
- (5) コミュニティイベントで紅葉狩りに

「共に生きるために」。今年、アジア学院の中心にあるこのモットーは、新型コロナウイルス感染症が世界で拡大したことにより、今までになくその真価が試されました。アジア学院の共同体は共に生きる、共に分かち合う生活を意図的に築き上げる場所です。住まい、掃除、料理や農作業から、遊び、音楽、悩みや喜びまで全てを分かち合っています。その中でも、共に生きることを最も象徴しているのは多様な人々が一つのテーブルを囲み食事をすることです。しかし、困ったことに今では大人数で食べたり話し合ったりすることは、このウイルスの脅威により、コミュニティの破壊、最悪は死に繋がる可能性さえある危険な行為とみなされるようになってしまいました。このような状況下、コロナウイルスによるアジア学院の変化を最も痛切に感じられるのはコイノニア食堂での食事の風景ではないかと感じています。

2020年以前にアジア学院を訪れた方は食事の時にこそ、このコミュニティの親密さを肌で感じたことと思います。8人掛けのテーブルに腰を下ろし、お皿を取ろうと

したときに隣の人に肘が当たったり、塩をくださいと言う間もなく会話や笑いが飛び交っていたりしたに違いありません。ところがソーシャルディスタンスが新しい「ノーマル」になった時、最初の対策として一つのテーブルは8人掛けから4人掛けに変わりました。料理を載せた大皿は全て前部にあるプラスチックシートで覆われたテーブルへ置かれるようになり、食べ物を取り皿に載せる前に念入りに手を洗い消毒をしなければなりません。マスクは食べている時以外、常に着用。各テーブルには手作りのパーティションが設置されました。透明で相手の顔が見えるのは良かったものの、音が全く通らなくて会話がほとんどできない状態でした。(幸いその後、声を通るように工夫し改造されました。) 平時であれば、食事の時間はビジターを歓迎し、人と繋がる良い機会なのですが、コロナ禍においては離れて座らなければならなかったり、時には食堂で食べることをすら許されない場合もあり、交流を制限され、ビジターの方にはかえって寂しい思いさせてしまうこともありました。



外部から来る人たち（周辺に住むスタッフやボランティア、ビジター、アジア学院に到着したばかりの長期ボランティアや学生など）の入場にも注意を払う必要がありました。緊急事態宣言が出ている間、ビジターや通いボランティアはキャンパスへの入場を禁止され、スタッフも可能な限り在宅勤務をするよう要請されました。宣言が解除されて以降も、到着したばかりの長期滞在者には入寮前2週間の観察期間が設けられ、毎日2回の検温と、コミュニティメンバーと一定の距離を保つことが求められました。また、キッチンには立ち入り禁止、フードライフワーク（朝夕の定例作業）は畑仕事のみとされ、寮とは別の建物での宿泊も義務付けられました。このルールはスタッフを含め、感染リスクの高い地域へ旅行をしたコミュニティメンバー全員に適用されました。

ソーシャルディスタンスを保たなければならないということは、共に生きる生き方を学ぶ上で欠かせない日常の活動、例えば朝の集いや、お互いを理解し合い親睦を深めるためのコミュニティイベントにも多大

な影響を及ぼしました。換気の悪い場所に大勢が集まって歌うことは感染リスクのある行為とみなされたため、オイコスチャペルに集まることは不適と判断し、毎日の朝の集いは屋外で行われるようになりました。最初はチャペル前の野外ステージ周辺に集まり、夏の日差しが強い時には木陰がある図書室の裏の芝生に移動しました。コミュニティメンバーが楽しみにしている毎月のコミュニティイベントに関しても、公民館やキャンパス外のほとんどの場所が入場規制されていたため、例年通りの企画を開催するのは困難でした。しかし、その分、各メンバーが創造性を発揮し、「日本文化デー」など、キャンパス内のできるイベントを企画しました。また、屋外で十分な距離を保ち感染予防を徹底した上で、花見をしたり、雪山を訪ねたりして、できる範囲で工夫を重ねました。

さて、このように様々な挑戦を試みた私たちのコロナ対策は成功だったのでしょうか。幸い、2021年5月現在まで、アジア学院のコロナウイルス感染者はゼロです。ただし、それを可能にしたのは、コミュニ

ティがいつもより小さく、十分な距離を保てたからというのも事実です。予定通り29名の学生が参加していたら、コイノニア食堂の中で2メートルの距離を保つことは物理的に不可能だったでしょう。そのような意味では少人数であったことがかえって幸いしたと言えます。

2020年は、困難の中に祝福を数える年でした。一人ひとりが貴重な存在であり、ここに居ることは当たり前ではないということに気付かされました。人々が家に留まり、他の人との接触を最小限にしている中、私たちがここで共に生きることができるのは驚くべき特権だということにも気付かされました。確かにマスクはしています。距離も保たなければなりません。握手やハグをすること、テーブルの周りやチャペルのベンチで密になることを恋しく思います。しかし、神様の恵みによって私たちは生かされ、ここに居ます。今でも笑います。今でも歌います。今でも希望があります。今でも、2メートル離れていても、共に生きる道を見つけ続けています。





筑波大学附属戸高校の皆さん（国際体験プログラム）

オープンラーニング・プログラム <<<<<<<<

“密”を解く

募金・国内事業課
教育プログラム報告



山下 崇
募金・国内事業課長
(教育プログラム・
那須セミナーハウス主事)

2011年の震災で一度途切れた関係を紡ぎ直し、新たな団体の参加も順調に増えてきたスタディキャンプの予約状況は、これまでで最大となっていました。しかし新型コロナウイルス感染症の影響でそのスケジュールはすべて白紙になってしまいました。結果的にビジター向けの教育プログラム収入は10分の1となり非常に大きな痛手となりました。

これまでアジア学院教育プログラムは、より多くの人がアジア学院の多様な人達と触れ合うことで国と国との境を縮めていけるよう、より“密”にすることを目指してプログラムを企画してきました。それだけにコロナウイルスとの相性は最悪とも言えました。感染症対策はいくら考えてもリスクをゼロにすることは叶わず、どのようにビジターを受け入れていくのか、アジア学院の中で暮らすコミュニティメンバーをどう守るのか、葛藤と不安を抱える日々が続きました。

しかし、この状況下で勇気をもって前へ踏み出したことにより、失ったものばかりではなく得られたものもありました。

昨年を以て事実上ストップしたと考えていたJICA 海外協力隊（以下JOCV）トレーニングがその一つです。懇意にしているJICA スタッフから「世界中に派遣されていたJOCVはパンデミックにより全員が帰国するよう命じられ、道半ばで帰ってきた隊員のモチベーションは著しく下がっている。そんな彼らに向けてプログ



(1) 有機肥料づくりを学ぶ JOCV 隊員たち
 (2) JOCV 隊員同士で体験や心境を共有し合う

ラムを作ることはできないか」というオファーを受け企画を行いました。7月と11月、計2回、合わせて16名の隊員の研修を実施することができました。以下は参加した隊員の感想です。

「ずっと家においてやる気が低下していたが、同じ境遇の JOCV 隊員やアジア学院の学生達と話すことで活力が戻りました」

「共に作業をし、食事を作り、食べるということがこんなにも心を元気にするとは思いませんでした」

もう一つ忘れ難かったことは、学生キリスト教友愛会（以下 SCF）のキャンプでした。キャンプを企画する際 SCF 主事からこのような話を聞きました。「コロナ禍で大学生たちが心も体も元気を失ってしまっている。キャンパスライフを送ることを楽しみにしていたのにオンラインのみの授業で大学に立ち入ることさえできない。自分がコロナにかかることで人に迷惑をかけたくない、ひたすら狭いアパートに閉じこもっている」

そうして行われた3泊4日のキャンプでは、押さえつけられ自らも押さえつけていた学生達の心や感情を解放し癒すことができたのではないかと感じました。

2020年は世界中で苦しみを分かち合った年だったといえると思

SNAPSHOT

セミナーハウスにラビリンズ完成

< < < < < <

“迷走”するのではなく“瞑想”するための「ラビリンズ」をご存知でしょうか？歩くことで気持ちを落ち着かせ、心を癒すこともできるこの不思議な道を作ってみようという企画が数年前からありました。

冬期、コロナ禍でビジターが減ったことで思わぬ形で時間ができ、スタッフとボランティアの協働で作業は進み、畑から集めてきた石と、2011年の震災で崩れた塀の一部を使って、費用を一切かけずに作ることができました。



います。アジア学院も不安や悩みを抱え制限をしながらビジターの受け入れを行ってきました。しかし土に触れ、人と話し、食を共にすることができるアジア学院の役割は非常に大きいということに改めて実感しました。

まだ不安は尽きませんが、人と共感し、人を癒し、人に希望を与えること、これが今の私たちの役割であると2021年の誓いを立てました。

那須セミナーハウスに宿泊した団体

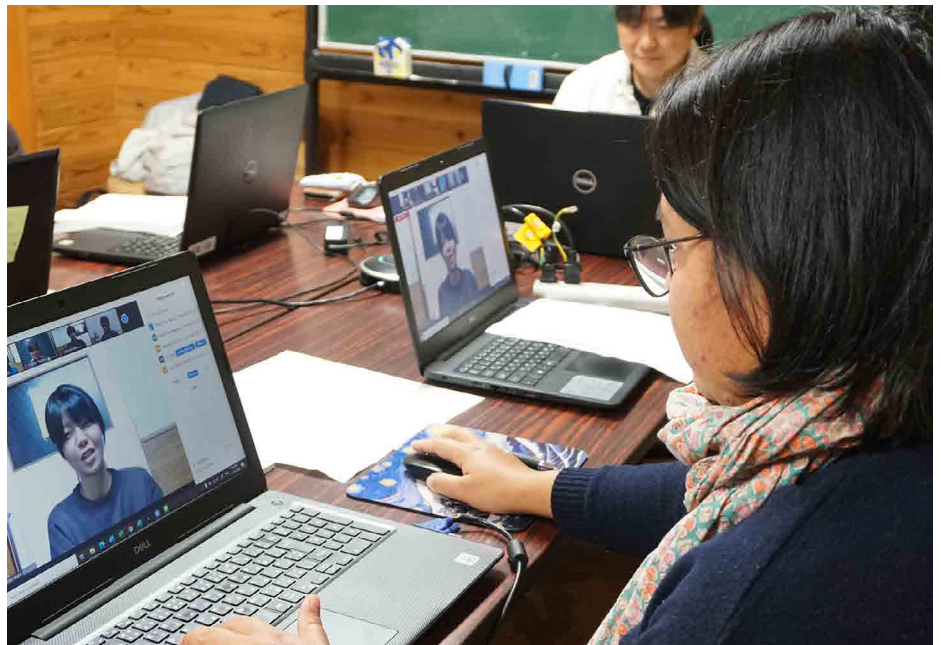
7/29 - 8/11	第一回 JICA 海外協力隊一時帰国隊員プログラム
8/27 - 8/30	学生キリスト教友愛会 (SCF) ①
8/30 - 9/2	学生キリスト教友愛会 (SCF) ②
10/15 - 10/21	日本写真芸術専門学校フォトフィールドワークゼミ
10/26 - 11/2	日本写真芸術専門学校フォトソーシャルゼミ
11/4 - 11/17	第二回 JICA 海外協力隊一時帰国隊員プログラム
11/21 - 11/23	筑波大学附属坂戸高校
11/27	アジア学院体験入学
2/16 - 2/19	ユースキャンプ
3/22 - 3/27	学生キリスト教友愛会 (SCF) ③
3/28 - 3/30	アジアキリスト教教育基金 (ACEF)

アジア学院ウェビナー

インターネットを介した
新しいコミュニティづくり



阿部 チャタジー・マノン
教務課・学生募集



「多様性」はアジア学院のコミュニティに欠かせないものです。学生、職員、ボランティアに加え、年間を通じて国内外からワーキングビジター、スタディキャンパー、インターンなどが参加し、共にコミュニティを形成しています。しかし、新型コロナウイルス感染症が世界的に広まったことで、アジア学院の生活は急変しました。

コロナ禍において、アジア学院のコミュニティの枠組みをより大きなものと捉え、これを維持することが重要であるという認識が、アジア学院の各部署で共通のものとなりました。これが「GCAP - Graduate Outreach (卒業生アウトリーチ)、Curriculum (教務)、Admissions (学生募集)、PR (広報)」

の共同作業の始まりでした。コロナ禍の不安の中で、特に私たちは、「ステイホーム」で自宅にいない方々のことを想いました。このことが、アジア学院ウェビナーが誕生したきっかけです。

初回のウェビナーは、日本人学生募集に特化したものでした。アジア学院についてもっと知りたいと思っている方々に2020年度の学生の声を共有することに重点を置きました。また、アジア学院が持つ温かな雰囲気伝えることにも力を入れました。

現在では、世界中のサポーターや卒業生、地域の方々など、より多くの方に参加してもらえるよう、ウェビナーを月に1回、定期的に開催しています。また、アジア学院

の理念に根ざしたトピックを取り上げています。テクノロジーを介してつながることは、現代の必然ではありますが、新型コロナウイルス感染症のパンデミックを通じて、さらにより多くの人々とつながることができるかと期待しています。私たちはこれからも、知識や経験を共有することによって、皆様と共に学び続けていきたいと思えます。



SNAPSHOT

アジア学院公式ホームページリニューアル

2021年3月末に、アジア学院公式ホームページをリニューアルしました。アジア学院のブランディング・イメージを一新し、アジア学院の理念と活動をより分かりやすく伝えられるようにホームページを構築したことで、農村指導者研修プログラムだけでなく、支援方法や訪問方法についても情報をより簡単に見つけていただけるようになりました。ぜひ新しくなったアジア学院ホームページをご覧ください。



刷新された
ホームページデザイン



<https://ari-edu.org>

SNSでアジア学院をより身近に

新型コロナウイルス感染症の蔓延により、訪問者の受け入れが難しくなった2020年度。国内、そして世界中にいるアジア学院と繋がる方々、また卒業生にアジア学院をもっと身近に感じてもらいたいと思うようになりました。そこで2020年4月にPRチームを結成し、公式SNS(Facebook、Instagram)に週3回、情報を投稿しています。

アジア学院の日々の風景やイベント情報、卒業生のストーリーを載せ、一年でフォロワー数は約2倍になりました。何より、「投稿を楽しみにしているよ」という声がとても嬉しく、大きな励みになっています。これからもぜひご覧ください。



フェイスブック



インスタグラム





フードライフを ご自宅で

販売部門報告



佐藤 裕美
募金・国内事業課
(販売・広報)

2020年度 ベスト売り上げ商品

第1位	豚肉	3,818,275 円
第2位	卵	2,349,277 円
第3位	米	1,419,470 円

- (1) 人気の健康セット
(2) 販売部門を手伝うボランティアさんたち



2020年度 栃木県内定期お取引先

乃木の郷、疎水の郷、愛菜園、ペンションシャローム、ノイ・フランク アトリエ那須、natural restaurant Ours Dining、starnet、那須倶楽部、サンノハチ、蔵楽、Chus、Cucina Hasegawa、古民家酒房菜音、ソサイ・ソウザイ、那須まづくり広場 あや市場、Bamboo Forest Kitchen

日本国内の社会全体として、生産や消費活動が縮小傾向にある上に、人々の流れが制限される中、この状況に甘んじることなく、創造力と信頼関係に基づいた協力体制を強化することを意識的に実務に取り入れた1年となりました。

2020年度における国内事業課の販売事業を俯瞰すると、教会や学校、支援団体主催のバザーなど、例年参加していたイベントほぼ全ての外販事業約30件がキャンセルになったことと、来校者の激減が大きな機会損失となりました。通常、学院内外のイベント販売から200万円前後、学院併設ショップから50万円程度の売上があり、その内訳は学院内で加工・製造するコーヒーやジャム、クッキーなど手軽なお土産としてご利用いただいている品目が主です。このことについては、早い段階で見通しを立て、お土産品の代わりに米や豚肉、卵など日々の食卓に供される食材の販路を拡大することに照準を合わせました。健康志向の方々に人気があり、また味に定評がある豚肉や卵は、地元での新規顧客の開拓が見込まれるとして販売事業に関わるメンバーと随時打ち合わせをし、製造や加工に費やしていた時間を豚肉と卵の配達や発送に当てました。クチコミでの評判が少しずつ広まっていったこともあり、新規お取引先として、オーガニックや地産地消をコンセプトにした飲食店、栃木県北部地域の福祉施設や山間部・農村部集落での共同購入グループや提携販売先から大口のご注文を頂くことができました。

一方で、既にアジア学院の商品をご存じであり、バザーでの商品購入を楽しみにしてくださっていた支援者の方向けに、アジアの土の発送に合わせたキャンペーン「健康セット」の販売を、季節に沿う内容に変えて3回行いました。お客様がご利用になる場面やお好みの傾向を考慮した組み合わせを紹介し、購入しやすい価格で提供させていただきました。さらに、販売促進の手段としてSNSを積極的に活用し、既存の支援者様のみならず初めてアジア学院にコンタクトをくださる方にも買いやすいラインナップを準備しました。商品とともに「アジアの土」のバックナンバーや学院紹介資料など読み物を添付することで、ステイホームの中にあってもアジア学院の活動に興味を持っていただけるよう工夫しました。

結果として、地道にできることを継続すると同時に前向きに新しいことにも取り組むことで、通りボランティアさんや地元の消費者の皆さまから応援いただくことができ、おかげ様で目標としていた数値以上かつ例年平均を上回る売上として1,200万円超を得ることができました。

コロナ禍のキーワード「移動は最小限に」は「地元の方々々と手を取り合い連携する」に、「ステイホーム」「免疫力を上げる」は「ご自宅でアジア学院の農産品を食し、フードライフを体験する」と換言し、苦境を乗り越えて新しい可能性を見出した一年でした。



サポーターと共に ※



届いています！皆さまの想い

目には見えないけれどそこにある、確かなつながりに支えられて
募金・国内事業課報告



佐久間 郁・ヴェロ
事務局長

2020年度を終えて振り返る時、そこにあるのはただただ感謝です。コロナ禍で、世界中が今も混乱の中であり、先行きが不透明な中で、皆様からのご支援や応援に私たちは何度も励まされ、勇気づけられました。

「今年誰も予想していなかったコロナ、今も世界中に広く長く蔓延しております。そういう中、『アジアの土』を拝読しておりますと、心が洗われ、希望が足元から未来に向かって感じられました。(T友の会 Hさん)」

「コロナ禍で大変ですが必要が満たされますように、皆様の健康が守られますように(C.Fさん)」

「学院の大切な働きをいつも応援しています。色々大変な状況と思いますが、皆さまが元気でこの状況を乗り切り、学院の大切な役割を担って頂けますよう、こころよりお祈りしています。(Y.Hさん)」等々。

目には見えない、たくさんの方々のご支援や関係、祈りのサポートがあって、アジア学院は存在しています。目には見えない想いが皆様のご支援の背後にあることを感じ、あらためて私たちの活動は、日本、そして世界中の皆さまとの「農村指導者の養成」「共に生きるために」を実現するための参加型大プロジェクトであることを思わされています。皆様抜きには私たちの研修はあり得ません。

コロナ禍で職員が外に出ることができない分、出来る範囲で支援者の皆さまに手紙を書き、電話をし、メールをし、アジア学院を支援するきっかけ等について聞くことができました。今後少しずつこのようなやり取りを増やし、アジア学院ならではのサポーターの皆様との絆を深めていきたいと考えています。3密を避ける生活の中で、あえてサポーターの皆様との関係は密に、人間らしいつながりを保ちたい。それは49年間変わらずそこにある素朴な草の根の人間関係なのかもしれません。

国内支援団体

(10万円以上の寄付・順不問)

奨学金

東京南ロータリークラブ、日本キリスト教協議会、(カ)聖コロンバン会、(カ)聖心会(あけの星修道院)、(一財)アジア農村交流協会、(一財)新倉会、(一財)日本福音ルーテル社団、(一社)東京アメリカンクラブ、(公)東京聖テモテ教会聖テモテ奉仕奨学金委員会、(独)日本学生支援機構(JASSO)、(公信)久保田豊基金

学校

(学)青山学院中高等部

諸団体

帰農志塾、全国友の会中央部、東京霞ヶ関ライオンズクラブ、ワールドファミリー基金、(医社)サマリヤ会、(一社)わかちあいプロジェクト、(公財)あしぎん国際交流財団、(公財)ウェスレー財団、(公財)かめのり財団、(公財)全国友の会振興財団、(公財)森村豊明会、(公社)スコーレ家庭教育振興協会、(宗)立正佼成会那須教会、IKE設計開発事務所

教会関係

河内キリスト集会、神戸ユニオンチャーチ、国際基督教大学教会、(カ)大田原教会、(カ)藤沢教会ネットワークともに、(教)阿佐ヶ谷教会、(教)西那須野教会、(公)聖オルバン教会、(教)霊南坂教会附属霊南坂幼稚園

(医社)医療法人社団、(一財)一般財団法人、(一社)一般社団法人、(学)学校法人、(カ)カトリック、(教)日本基督教団、(公)日本聖公会、(公財)公益財団法人、(公社)公益社団法人、(公信)公益信託、(宗)宗教法人、(独)独立行政法人



「新しい日常」でも 日々の貢献に尽力くださった ボランティアの皆さま



佐藤 裕美
募金・国内事業課
(販売・広報)

農場から給食、教務、事務とすべての面で新しい対応を迫られ、またそれに臨機応変に適応していった一年を振り返ると、ボランティアが果たした役割は例年以上といえるものでした。応募の動機は様々で、留学プログラムが中止になったり、大学に通学できないがオンライン授業だからこそ時間を有効に使いたいということで応募された方もいました。結果として、2020年度長期ボランティアは日本からのべ14名、海外からのべ8名（2019年度に開始した方を含む）と、過去にない大人数となりました。通常、特に日本人ボランティアの数が多く場合、英語を話す機会が減り、意思疎通のしやすい日本人同士で集まりますが、ボランティア各人の参加目的意識は高く、また担当業務にも真摯に取り組み、コミュニティ全体を盛り上げ、牽引する役割を担うこともありました。アジア学院としても、できる限り多くの時間を個人あるいはグループでのコンサルテーションにあて、ボランティアの存在意義について共に

振り返り、各人の気持ちに寄り添うよう試みました。一方で、地元在住の通いボランティアの方々も、一時は数週間の活動自粛をお願いし、場合によっては足が遠のいてしまうのではないかと懸念もありましたが、アジア学院の新型コロナウイルス感染症対策ガイドラインに基づいて、臨機応変に活動に参加してくださいました。そのおかげで学生が少ない中でも、教育の質が保たれ、農場や給食などフードライフに根差した活動を安定して継続することができました。

社会全体が健康や経済活動に対し漠然とした不安に包まれ、また状況が刻々と変化する中で、アジア学院のフードライフや共同体形成、奉仕する指導者という揺るがない理念に、ボランティアの方お一人おひとりが共感くださり、またスタッフや学生と共に協働いただくことで、自身の生き方について考えを深めることができた、と振り返る方もいらっしゃいました。



海外ボランティア派遣団体

Brethren Volunteer Service (米国)、
Social Peace Service Kassel, e.V. (SFD) (ドイツ)、
米国合同教会・キリスト教会共同世界宣教(米国)、
合同メソジスト教会世界宣教(米国)

海外からの 途切れることのないサポート

国際関係課報告



キャシー・フローディ
国際関係課長

2020年度、世界中がそうであったようにアジア学院も多くの課題に直面しました。祈り、思いやり、そして贈り物を通して私たちが覚え、ご支援くださったアジア学院のサポーターそしてパートナーの皆様へ感謝いたします。アジア学院のキャンパスに来ていただいたり、お伺いしたりと、直接会うことはできませんでしたが、電子メールやビデオ通話で連絡を取り合うことができたのは心強いことでした。皆様にとっても困難が多い中、アジア学院の使命に共感しご支援くださったことで、アジア学院は2020年度の研修を実施することができました。

多岐にわたる支援

コロナ禍での国内外とのつながりは、カナダ合同教会からのコロナ対策助成金で導入された情報通信技術機器によって可能となりました。ビデオ会議システムにより、外部講師や海外の卒業生との授業ができるようになったり、個人がタブレットを使用することで、双方向の授業も実現できました。さらにコロナ感染予防のための衛生用品を購入したり、アジア学院卒業生が主導したガーナでの予期せぬ研修(P.4参照)を支援することもできました。(この研修はカナダ合同教会及びアメリカ福音ルーテル教会からもご支援いただきました。)また他のキリスト教会・団体からも奨学金支援と研修関連支援をいただきました(右下の海外支援団体一覧を参照)。

新型コロナウイルス感染症とは別に、鳥インフルエンザと豚熱が世界的に大流行し、新たな伝染病対策が必要となりました。そのひとつとして豚舎周りに防護柵を設置しましたが、その費用もカナダ合同教会が担ってくださいました。

2020年度のインターンシップと海外ボランティアプログラムは全てキャンセルされました。才能にあふれ、毎年コミュニティを豊かにしてくれる仲間がいないことは大変残念でした。

長年のアジア学院支援者や創設者の高見敏弘氏の友人たちが神さまの御元に召されました。マージ・タール氏、エヴェリン・クローラー氏、フレッド・クラーク氏のご家族に哀悼の意を表します。

アジア学院北米後援会(AFARI)は、資金調達能力を強化し組織として成長するため、資金調達およびアウトリーチコーディネーターとしてシェリ・デリオン氏を迎えました。これまで、アジア学院と世界中の友人、サポーター、卒業生との関係を築き上げたJB・フーパー氏(元専務理事 次頁に挨拶)とデイビッド・コーツワース氏(元事務局長)の長年にわたる献身的な働きに感謝します。



(1) 西日本研修旅行で九州地方を視察する学生
(2) 教室にビデオ会議システムを導入
(3) 新設された豚舎の防護柵

海外支援団体

(10万円以上の寄付・順不問)

研修関連支援

カナダ合同教会
米国合同教会・キリスト教会共同世界宣教
合同メソジスト教会世界宣教
ドイツの連帯のための宣教会(EMS)

奨学金支援

アメリカ福音ルーテル教会(ELCA)
合同メソジスト教会世界宣教(米国)
英国メソジスト教会(英国)
アジア学院北米後援会(AFARI)

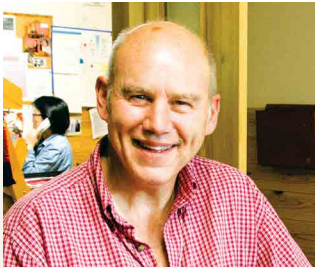
2020 Snapshots



荒川校長と非電化工房・藤村靖之氏

震災10年とアジア学院ベクレルセンター

東日本大震災から10周年を迎え、アジア学院ベクレルセンター（通称ABC）の活動も10年目に入りました。毎年震災の起きた3月11日には学院内で記念礼拝をまもり、当時の体験を聞く機会を持っています。今年は記念礼拝に加え、当時地域市民による大規模な放射能測定活動「那須希望の砦」をリードした藤村靖之氏（非電化工房代表）をお迎えして、「3.11 震災から10年を経て～これまでとこれからと～」を開催しました。アジア学院ベクレルセンターはこの測定活動に加わっていたメンバーによって2012年1月に始まり、今も運営されています。これまでに測定した検体は6600件を超え、地域の放射能汚染の実態を知るうえで重要な情報を収集、発信し続けています。



元北米後援会専務理事 JB・フーバー氏が引退 長年の働きに感謝

1993年から2005年までアジア学院で学生募集コーディネーターとして働いていた、JB・フーバー氏。米国に帰国後、彼はアジア学院北米後援会（AFARI）で14年間勤務、内10年間は専務理事を務めました。さらに彼はアジア学院の卒業生と共に米国内の重要な支援者拠点を訪ね、講演や宣伝活動を重ねながら米国内の支援者ネットワーク形成に尽力してくれました。

活発で献身的なトレイルランナーでもある彼は、毎年マラソン大会に参加し、「Run for scholarship（奨学金ラン）」と銘打って奨学金キャンペーンを立ち上げ、これまで15万ドル（約1500万円）以上の資金調達に成功し、2007年以降、21人の学生の奨学金を支援してきました。AFARI 理事長のマーガレット・ホフマイスター牧師は、次のように述べています。「彼の最大の賜物は、アジア学院のストーリーを共有して人々の心を突き動かすことができることです。これこそがアジア学院の使命に対する彼の奉仕なのです。」

JBさん、アジア学院への長年の働きと寛大な心をありがとう。



海外からの支援により 太陽光発電設備を新設

持続可能性は、アジア学院を導く基本原則の1つです。私たちは食料生産において90%自給自足ですが、電気と暖房エネルギーのほとんどを購入しています。この購入したエネルギーの源は主に化石燃料であるため、二酸化炭素排出量が大きくなります。

アジア学院の新しいソーラーパネルは、持続可能なエネルギー利用へ向けての第一歩となるものです。新設された容量17,010kWの太陽光発電システムは、二酸化炭素排出量を約8,263 kg削減し、電気代を年間約43万円節約します。全体として、化石燃料への依存度を約16%削減することができます。9月に設置されて以来、システムは順調に稼働中です。設置費用はアメリカのThe John and Frank Sporacio Charitable Foundationよりご寄付いただきました。

この太陽光発電システムは、地球温暖化対策のケーススタディとして、学生の授業にも取り入れられます。また、このプロジェクトは、国連の持続可能な開発目標（SDGs）とも関連し、持続可能なエネルギーに対して私たちが打ち立てた長期計画の重要項目の一つとなっています。



ウォルター・ショア氏による アジア学院設立の記録を再発見

故ウォルター・ショア氏は高見先生とアジア学院の創設に尽力した一人です。農家でもあったショア氏は、自身の農業の知識を活かして、アジア学院建設のための土地選びの任をまかされ、設立の申請業務においても多大な貢献をされました。

ショア氏はアジア学院創設10周年記念のために、自分の日記に基づいて創設時の出来事や思い出を書き著していましたが、その本は長らく所在不明になっていました。しかし、その本が最近になってショア氏の御子息らによって再編され、アジア学院に戻ってきました。この本に書かれている内容は、アジア学院設立の過程を知る上で大変重要な資料となるでしょう。

卒業生とのつながり



スリランカ卒業生のニシャンタ・グナラトネ司祭(左)の団体がやっている食料支援活動

新型コロナウイルス 感染症と 世界の卒業生

卒業生アウトリーチ部門報告



スティーブン・カッティング
卒業生アウトリーチ課長

ミャンマーのマナ・フレイ(19卒)の住む村は人里離れた場所にあり、鬱蒼とした山道をバイクで4時間かけてやっとたどり着きます。たどり着くのも大変なその村に、2020年2月に私が到着して最初に受けた質問は、「新型コロナウイルス感染症の中、旅は大変ではありませんでしたか?」でした。新型コロナウイルス感染症のニュースが、すでにこの孤立した村まで届いているという事実は、世界的なパンデミックがすぐそこで起こりつつあるという衝撃的な認識を私に与えました。

それから数か月間、私は世界中の卒業生に連絡を取り、彼らの置かれている状況が著しく類似していることを発見しました。地域社会における厳しい規制、経済的困難、死、そして病は、日本の状況とも一致していました。不思議なことに、これらの共通した経験を共有することで、私は世界中にいる「アジア学院ファミリー」を身近に感じました。私は多くの回復力と愛のストーリーに感動しました。何人かの卒業生は、市場の食料が不足し、価格が高騰する中で、食べるものを周りの人々と分かち合いました。自給自足の価値を知っていた彼らの庭にはたくさんの食べものが栽培されていたのです。また頼れるコミュニティリーダー

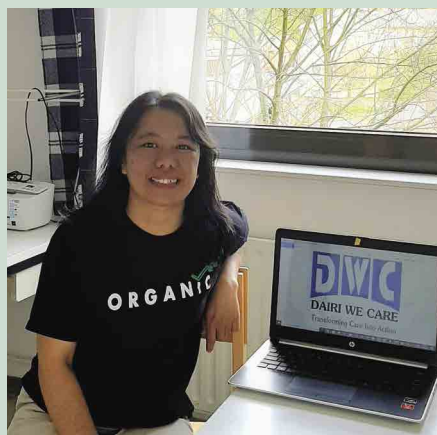
として、彼らはできる限りの方法で他の人を助けるために早い段階で行動を取りました。

オンラインでつながる アジア学院卒業生

今年には多くの国際会議がオンラインで開催され、卒業生はかつてないほどこうした会議に参加が可能になりました。アメリカで開催された「ECHO 国際農業会議」には多くの卒業生が出席しました。シエラレオネ出身の卒業生であるマンブツ・サマイ(18卒)は、オックスフォード大学の「リアルファーム(オンライン)会議」で、母国の内戦により手足を失った人々との働きにおける「農業がもつ癒しの効果」について発表しました。

オンラインに移行することで、アジア学院が卒業生をゲスト講師として授業に招くことも可能になりました。2020年度の研修では、ウェスリー・リング(93卒)がインドネシアから講師を務め、有機農家および村のリーダーとしての彼の知恵を2020年度の学生に共有してくれました。これらのことは、研修プログラムにおける卒業生の役割と可能性を私たちに気づかせてくれる大きなきっかけとなりました。

卒業生からのメッセージ



リディア・ナイバホ

インドネシア（'11卒）
ゲッティンゲン大学（ドイツ）で
持続可能な国際農業を研究中

新型コロナウイルスに対する
スティグマ（不名誉・汚名）の侵食

コロナ禍で最も心配なことのひとつは、この病に苦しむ人々に関連する偏見でした。これは感染者だけでなく、その人と接触している家族にも影響を及ぼしました。感染した方の親戚の一人は近所の人々から避けられ、侮辱され、そして村から追い出すと脅されることもありました。他の場所では感染者の遺体が公共墓地で埋葬できなかったり、健康監視チームと住民間に不信感が生じていますが、これらはコロナウイルスに関する情報が不足していることと、ソーシャルメディアに投稿された多くの誤った噂やデマに起因しています。

私は母国を離れています。故郷であるダイリ県の人々を助けたいと、友達と一緒に「Dairi We Care（ダイリを想う）」という募金活動を始めました。私たちの活動の1つは、誤って人に汚名を着せないように社会を教育することです。ありがたいことに、これらの偏見は今では大幅に削減されています。学校を閉鎖するなどの政府の規制は、私たちのメッセージが社会に浸透したことの表れでした。現在、一般の人々は誰でも新型コロナウイルス感染症に感染するという危機感を持ち、行動規律と健康維持の指針にしたがうことで感染を回避できています。ゆっくりではありますが、インドネシア人はパンデミックの中で「新しい日常」に順応しています。



パトリック・クリエ

リベリア（'19卒）
ヴォインジャマ自由ペンテコステ教会

危機が思い出させてくれるもの

パンデミックの真っ只中の春、リベリア政府が緊急事態宣言を発令し、私は家族と村の農場に移りました。そこで私たちは自分たちの有機作物を育てることができたので、食べものの心配は全くなく、人ごみを避けることができました。そこで人々は幸せでした。今日、私たちは町に戻ってきました。学校が再開され、私は「教育のための農場プログラム」というプロジェクトを開始しました。

2020年を振り返ると、危機は私に活気に満ちた強い個性をもたらしたと感じています。コロナ禍は私が人生で経験した3番目に大きな危機です。最初にリベリア内戦があり、次に新型コロナ感染症よりもはるかに致命的で破壊的な2014年のエボラ出血熱の蔓延があり、そして新型コロナ感染症です。このような時代に、私たちの心、体、そして精神は様々な「緊急事態」に対応する必要があります。そして、私たちの人生は壊れやすく予測不可能であり、私たちは皆弱くて人の助けが必要であることを、危機は思い出させてくれるのです。



ルシネイ・テレス

ブラジル（'10卒）
土地なし農民運動

アース・ランチボックス
（大地の弁当）

新型コロナウイルス感染症が世界中に蔓延し始めてから、私たちの組織が5月から行っている活動の1つに、アース・ランチボックスと呼ばれるプロジェクトがあります。地方や都市部で、脆弱な状況にある人々やホームレスの人々に、週700食以上のお弁当を作り配布しています。食料品のほとんどは、私たちの運動に参加している土地を持たない農民と土地を所有する農民から寄付されています。

これらの活動はパラナ州の州都であるクリチバで展開されており、結果的には農民にとって農業改革による土地の分配に続く新たな恩恵となったので、この活動を継続する上での一助となっています。今年2月にはこれまで作ったアース・ランチボックスは40,000個に到達しました！

テレスさんのインスタグラム：
https://www.instagram.com/marmitas_daterra/



会計報告



総括

事業活動収支は、全体として収入が減ったものの、支出もほぼ同額を抑えられ、収支のバランスが例年に似た形で終わることができました。

一方資金収支の翌年度繰り越し支払金は58,761,950円で、前年度末との差額は34,702,829円増となっています。当初予測していた新型コロナウイルス感染症の影響は最小限に抑えられているものの、資金繰りは厳しい状況が続いています。

貸借対照表

2020年度の資産は前年度末より約5千万円減少し、約8億8千万円となりました。これには手形(預金担保5,130万円)の満期解約が含まれています。将来への備えとしての退職給与引当特定資産300万円、施設設備維持引当特定資産約245万円、合計約545万円の積立てを例年通り継続することができました。

一方負債の部は約750万円減少し、約1億990万円となりました。長期借入金返済(346万円)及び学校債償還(450万円)の合計796万円を返済しました。但し、資金繰りが厳しいことを見据え、日本政策金融公庫融資から3,000万円を借入、学校債1,080万円を新規発行し財政の安定化を図りました。

事業活動収支

学生生徒等納付金 23,047,946円(予算比102%、前年比59%)

コロナ禍の影響で学生数が11名となり、海外学生の奨学金が減ったことで大幅に減少しました。しかし国内奨学団体の中には、奨学生が来日できない事情をご理解頂き、補助金寄付への振替を承諾して下さる団体もありました。

寄付金 76,679,123円(予算比92%、前年比132%)

コロナ禍対応の緊急支援や個人からの大口寄付等の予算外収入が約1,450万円あったこともあり、予想していた寄付金収入減を最小限に抑えることができました。国内寄付は前年とほぼ同額で、中でも個人寄付は前年比で117%と伸び、特に1万円以上10万円未満の個人寄付者の額が前年比で149%と増えました。団体寄付は89.5%と減少しました。一方海外寄付は、前年比178%と健闘しました。

経常費等補助金 3,191,177円(予算比358%、前年比355%)

コロナ禍で以下の公的補助金を受け取ることができました。『学びの継続』の為に学生支援緊急給付金(文科省)学生8名分(80万円)小学校等休業対応の両立支援等助成金(厚労省)職員3名(135,177円)持続化給付金(200万円)

付随事業収入 20,067,358円(予算比106%、前年比84%)

補助活動収入は当初の予算よりも約545万円減ったものの、長期ワーキングビジターやJICA海外協力隊帰国者プログラムの開催、食堂収入などで、懸念されていたコロナの影響での収入減を最小限に抑えることができました。販売収入もコロナ禍でバザーの機会が減ったにも関わらず、前年と同レベルの収入(約1,220万円)を維持することができました。特に畜産物の販売が600万円を超え、予算比127%、前年比119%と大きな伸びを見せました。



佐久間 郁・ヴェロ
事務局長

今後も引き続き新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けることが予測され、厳しい財政及び運営が続くと思います。持続可能なキャンパス、魅力ある学校を目指し、コロナ禍でなし得る手段を模索し、財政の安定化に努めたいと思います。これからもご協力の程よろしくお願い致します。

監査報告

学校法人アジア学院寄付行為第7条の規定に基づき、2020年度の事業および会計の状況について監査した結果、適性に執行されたものと認めます。

2021年5月12日
学校法人アジア学院

大久保知宏 村田 榮

監事：大久保知宏

監事：村田榮

貸借対照表

資産の部	2019年度末	2020年度末
固定資産	894,495,458	815,545,924
有形固定資産	791,145,229	761,162,555
土地	216,420,666	216,420,666
建物	544,262,462	512,849,907
構築物	14,520,194	17,000,989
教育研究用機器備品	5,439,053	4,059,303
管理用機器備品	1,099,546	1,566,199
図書	6,380,612	6,380,612
車両	2,022,696	2,884,879
建設仮勘定	1,000,000	0
特定資産	101,726,112	53,986,649
第3号基本金引当特定資産	73,127,321	20,224,047
退職給与引当特定資産	20,071,084	22,533,570
施設設備維持引当特定資産	8,527,707	11,229,032
その他の固定資産	1,624,117	396,720
電話加入権	161,600	161,600
出資金	154,000	139,000
預託金・保証金	91,530	96,120
奨学金特定預金	1,216,987	0
流動資産	36,106,332	65,418,033
現金預金	24,059,121	58,761,950
未収入金	695,200	1,099,735
貯蔵品	1,643,500	0
販売用品	3,302,209	3,241,437
前払金	5,473,340	2,134,743
仮払金	932,962	180,168
資産の部合計	930,601,790	880,963,957

負債の部

固定負債	91,725,665	157,026,175
長期借入金	45,400,000	71,940,000
学校債	2,000,000	38,300,000
退職給与引当金	19,196,530	21,657,040
復興事業修繕引当金	25,129,135	25,129,135
流動負債	114,904,719	42,173,310
短期借入金	65,460,000	15,460,000
1年以内償還予定学校債	31,210,000	1,210,000
未払金	1,089,593	4,739,788
未払金消費税	304,800	295,900
前受金	14,369,568	18,011,113
預り金	2,470,758	2,456,509
負債の部合計	206,630,384	199,199,485

純資産の部

基本金		
第1号基本金	1,117,848,625	1,123,524,189
第3号基本金	73,127,321	73,127,321
第4号基本金	11,000,000	11,000,000
基本金の部合計	1,201,975,946	1,207,651,510

事業活動収支差額の部

翌年度繰越収支差額	-478,004,540	-525,887,038
内今年度事業活動収支差額	-43,632,826	-42,206,934

純資産の部合計 723,971,406 681,764,472

負債及び純資産の部合計 930,601,790 880,963,957

資金収支

前年度繰越支払資金	39,009,285	24,059,121
翌年度繰越収支差額	24,059,121	58,761,950



事業活動収支

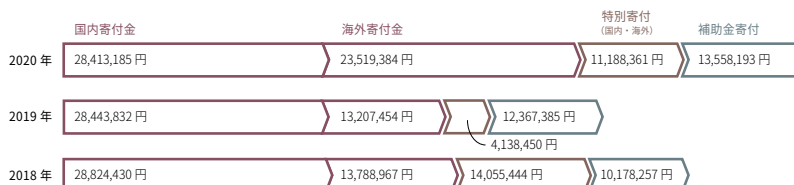
事業活動収入の部	2020年予算	2020年決算	2021年予算
教育活動収入			
学生生徒等納付金 ¹	22,641,760	23,047,946	32,219,800
授業料	2,564,000	2,564,000	3,600,000
入学金	289,900	289,900	480,000
食事費	818,500	693,500	1,140,000
施設設備資金	818,500	693,500	1,140,000
渡航費	1,050,000	1,050,000	50,000
国内個人学費指定納付金	7,870,000	8,418,000	10,884,000
国内団体学費指定納付金	2,383,920	2,383,920	2,000,000
海外個人学費指定納付金	6,470,700	6,470,700	12,050,000
海外団体学費指定納付金	376,240	484,426	875,800
手数料収入	32,000	30,800	32,000
寄付金	83,103,733	76,679,123	78,886,043
国内国外一般寄付金	53,871,854	51,932,569	40,105,000
国内個人寄付金	11,800,000	13,096,342	10,620,000
国内団体寄付金	12,000,000	15,316,843	16,335,000
海外個人寄付金	5,436,144	5,485,744	5,000,000
海外団体寄付金	24,635,710	18,033,640	8,150,000
補助金寄付	16,735,620	13,558,193	8,033,600
特別寄付金 ²	12,496,259	11,188,361	30,747,443
経常費等補助金	891,177	3,191,177	0
国庫補助金	635,177	2,935,177	0
地方公共団体補助金	256,000	256,000	0
付随事業収入 ³	18,870,000	20,067,358	18,683,000
雑収入	4,084,500	4,529,167	5,528,000
施設設備利用料	2,884,500	3,149,694	3,416,000
出版物売却収入	200,000	72,400	120,000
その他雑収入	1,000,000	1,307,073	1,992,000
教育活動収入計	129,623,170	127,545,571	135,348,843
教育活動外収入	0	109,215	0
受取利息・配当金	0	11,259	0
その他の教育活動外収入	0	97,956	0
特別収入	0	15,319	0
資産売却差額	0	15,319	0
事業活動収入合計	129,623,170	127,670,105	135,348,843

事業活動支出の部

教育活動支出 ⁴			
人件費支出	80,966,229	83,117,109	83,064,496
教育研究費	24,865,947	20,906,078	26,993,997
管理経費	64,857,768	64,756,110	66,105,745
内減価償却費	41,187,774	42,331,351	41,795,395
教育活動収入計	170,689,944	168,779,297	176,164,238
教育活動外支出計	1,493,308	996,546	980,000
借入金等利息支出	683,308	714,046	790,000
学校債利息支出	810,000	282,500	190,000
特別支出計	0	101,196	0
資産処分差額	0	101,196	0
事業活動支出合計	172,183,252	169,877,039	177,144,238
基本金組入合計	0	-5,675,564	0
当年度収支差額	-42,560,082	-47,882,498	-41,795,395

寄付金の種類別割合

合計 76,679,123 円



教育活動支出の内訳

人件費支出	83,117,109
教員人件費	19,644,814
職員(含嘱託)人件費	52,790,345
その他人件費	10,681,950
教育研究費	20,906,078
消耗品費	588,003
光熱水費	2,449,866
旅費交通費	356,275
奨学費	1,538,726
見学費	947,144
実験実習費	5,300,747
学生交通費	50,782
学生渡航費	3,811,259
教材費	233,808
研究費	236,717
宿舍費	142,234
学生厚生費	282,967
職員研修費	295,416
事務費	1,001,770
諸会費	39,100
卒業生同窓会支援費	0
プロジェクト費	33,411
特別講師費	714,165
車両費(バス・農業用車両)	1,240,188
雑費	0
貯蔵品振替差額	1,643,500
管理経費	64,756,110
消耗品費	141,228
光熱水費	1,077,320
旅費交通費	240,807
募金費	3,237,731
車両燃料費	610,632
福利費	154,838
通信運搬費	941,750
事務費	4,655,744
出版物費	878,013
車両修繕費	1,303,351
営繕費	2,024,525
損害保険料	931,050
賃借料	1,153,552
公租公課	729,750
諸会費	156,250
会議費	57,764
報酬委託手数料	1,826,847
補助活動収入原価	2,103,327
行事費	60,704
渉外費	24,199
雑費	115,377
減価償却費	42,331,351
教育活動支出の部合計	168,779,297

注釈

- ¹ 学生生徒等納付金には次のものが含まれる。
 入学金：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち入学金として指定されたもの
 食事費：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち食事費として指定されたもの
 施設設備資金：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち寮費・施設設備資金として指定されたもの
- ² 特別寄付金は、予算に計上されていない30万円以上の寄付(個人・団体)が含まれる。
- ³ 農産物、加工食品、民芸品等の販売、プログラム等による収入。
- ⁴ 2020年度教育活動支出の内訳については、上記を参照。

カリキュラム一覧

研修時間総計：1,880 時間
* 特別講師

指導者論

アジア学院の指導者論	荒川 朋子
サーバント・リーダーシップ	荒川 朋子、大柳 由紀子
アジア学院の歴史と建学の精神	荒川 朋子
参加型農村調査法	荒川 朋子、大柳 由紀子
自律学習	大柳 由紀子
時間管理法	ティモティ・B・アパウ
プレゼンテーション技術	大柳 由紀子
ファシリテーション技術	ザチボル・ラコー・ドーズ*
ファシリテーション技術2	大柳 由紀子
宗教と農村生活	ジョナサン・マッカーリー、ティモティ・B・アパウ
報告書作成指導	キャシー・フローディ
コーチング	大柳 由紀子
平和と正義と和解	石原 明子* (熊本大学准教授)
尊敬	ジェフリー・メンセンディック* (桜美林大学准教授・チャプレン)

開発論

環境と開発	佐藤 真久* (東京都市大学教授)、大柳 由紀子
栄養概論	金森 郁美
家計管理	ザチボル・ラコー・ドーズ*
共助組合論	ギルバート・ホガング
ローカライゼーション	鎌田 陽司* (NPO 法人「懐かしい未来」代表)
ジェンダー論	荒川 朋子
足尾銅山鉱毒事件と田中正造	坂原 辰男* (田中正造大学事務局長)
気候変動のもたらす問題	永田 佳之* (聖心女子大学教授)
那須疎水と西那須野開拓の歴史	大柳 由紀子
日本の有機農業運動と JA	大柳 由紀子
川西町における農村開発戦略	原田 俊二*
湯布院における共同体開発戦略	スティーブン・カッティング
長井レインボープランと菅野芳秀	大柳 由紀子
SDGs とアジア学院カリキュラム	阿部・チャタジー・マノン
日本のホームレス問題	大柳 由紀子、阿部・チャタジー・マノン

持続可能な農業・技術

有機農業	荒川 治
野菜・作物概論	荒川 治
稲作技術	荒川 治
畜産概論	ギルバート・ホガング、大谷 崇、ティモティ・B・アパウ
作物病害虫管理	荒川 治
畜産病害虫管理	ギルバート・ホガング、大谷 崇、ティモティ・B・アパウ
化学農業の危険性	田坂 興亜* (アジア学院元理事長)
熱帯における自然農業	村上 真平* (全国愛農会会長)
アグロフォレストリー	山田 祐彰* (東京農工大学教授)
生産者と消費者の提携	戸松 礼菜* (帰農志塾)
バイオガスワークショップ	桑原 衛* (NPO ふうと代表)
農業技術実習	荒川 治、櫻井 将伸
畜産技術実習	ギルバート・ホガング、大谷 崇、ティモティ・B・アパウ
肉加工実習	大谷 崇、小出 秀夫* (ノイ・フランク那須)

卒業生セミナー

組織的持続可能性	ウェスリー・リンガ* ('93 卒、'99TA・インドネシア Rural Development Action 代表)、ザチボル・ラコー・ドーズ* ('00 卒、'09TA・インド)
----------	---

日本語、日本文化

小倉 恭子*

有機農業実習

野菜作物： ぼかし肥作り、堆肥作り、土着菌の採取と活用、天恵緑汁、魚のアミノ酸資材、水溶性カルシウム、炭焼きと木酢作り、籾殻くん炭、自家採種、練り床を利用した苗作り、キノコ栽培

畜産： 養豚（人工授精、出産、去勢）、養鶏（育雛、人工ふ化）、養魚、家畜衛生、飼料配合、発酵飼料作り、発酵床式畜舎

肉加工： ソーセージ、ハム

農場管理活動

グループによる農場管理（野菜作物栽培および畜産管理）
フードライフワーク（自給自足のための農作業および給食準備）
グループリーダーシステム

その他の研修

コミュニティ・ワーク（田植え、稲刈りなど）、内的成長を促す活動（朝の集会、コンサルテーション、リフレクションペーパー、振り返りの日）、口頭発表、収穫感謝の日、国際交流プログラム、見学研修、農村地域研修旅行、西日本研修旅行など

研修でお世話になった方々

(敬称略、順不同)

農業関連見学・研修先

帰農志塾、金子美登・金子宗郎、田下隆一、桑原衛、民間稲作研究所

見学先・交流団体

【栃木県】足尾銅山鉱毒事件学習（旧松木村跡、足尾製錬所）、渡瀬川遊水池、宇都宮北高校、西那須野教会、那須塩原教会、家の教会しおん、矢板教会、塩谷一粒教会、松原教会、氏家教会、足利教会、小山教会、鹿沼キリスト教会

【他府県】渡良瀬川鉱毒根絶太田既成同盟会、桐生東部教会

農村地域研修

【栃木県】森林の牧場、まんまる農園、ドンカメ、バターのいっこ、Chus、非電化工房、大日向マルシェ、HIKARI 食堂、陽だまり農場、月 noco

西日本研修旅行

【熊本県】大澤菜穂子、からたち、水保病歴史考証館、坂本しのぶ（証言者）

【長崎県】原爆資料館、浦上天主堂、日本 26 聖人記念館、出島資料館、大浦天主堂

【大阪府】大阪南 YMCA、野宿者ネットワーク（生田武志）

コミュニティメンバー一覽



役員

理事長

星野 正興 日本基督教団愛川伝道所牧師

副理事長

遠藤 抱一 アジア学院首都圏事務所事務局長

理事

荒川 朋子 アジア農村指導者養成専門学校校長
後宮 敬爾 日本基督教団靈南坂教会牧師
門脇 英晴 (株)日本総合研究所特別顧問
小海 光 公益財団法人 ウェスレー財団代表理事
佐藤 範明 ホテルサンバレー那須顧問
矢萩 栄司 日本聖公会下館聖公会牧師
山根 正彦 (学)香川栄養学園 元常務理事
山本 俊正 元関西学院大学教授

監事

大久保 知宏 藤井産業(株) 執行役員 総務部長
村田 榮 那須ワイズメンズクラブ

評議員

荒川 治 アジア農村指導者養成専門学校副校長
荒川 朋子 アジア農村指導者養成専門学校校長
粟谷 しのぶ 弁護士、戸野・田並法律事務所
伊藤 幸史 カトリック新潟教区司祭
遠藤 抱一 アジア学院首都圏事務所事務局長
大柳 由紀子 アジア農村指導者養成専門学校副校長
門脇 英晴 (株)日本総合研究所特別顧問
菊地 功 カトリック東京大司教教区大司教
小海 光 公益財団法人 ウェスレー財団代表理事
佐久間 郁・ヴェロ アジア農村指導者養成専門学校事務局長
千 相鉉 在日大韓基督教会札幌教会主任牧師
長嶋 清 元アジア農村指導者養成専門学校職員
永田 佳之 聖心女子大学現代教養学部教育学科教授
潘 炯旭 日本基督教団西那須野教会牧師
福本 光夫 (学)西那須野学園 西那須野幼稚園園長
星野 正興 日本基督教団愛川伝道所牧師
山口 和枝 元全国友の会代表
山根 正彦 (学)香川栄養学園 元常務理事
米田 ミチル 聖母訪問会総長
セラジーン・ロシート NGO/NPO コンサルタント

職員

荒川 朋子 校長
大柳 由紀子 副校長、教務主任(教務課長)
荒川 治 副校長、教育部長、農場長(フードライフ課長)
佐久間 郁・ヴェロ 事務局長(総務課長)
阿部・チャタジー・マノシ 教務課(学生募集)
スティーブン・カッティング 教務課(卒業生アウトリーチ)
田仲 順子 教務課(図書)
ティモティ・B・アバウ チャブレン、教務課(共同体生活)、
フードライフ課(畜産)
ジョナサン・マッカーリー チャブレン、教務課(共同体生活)
メレディス・ホフマン 教務課(共同体生活)
マッカーリー 里美 教務課(共同体生活)
櫻井 将伸 フードライフ課(野菜・作物)
大谷 崇 フードライフ課(畜産)
ギルバート・ホガング フードライフ課(畜産)
眞木 凌(2021年3月~) フードライフ課(畜産)
金森 郁美 フードライフ課(給食)
ラビアル・ラモン・J・エスメリオ フードライフ課(給食)
井澤 酪 総務課(総務補佐)
君嶋 満恵 総務課(会計)
安藤 香 総務課(庶務)
キャシー・フローディ 国際関係課長
山下 崇 募金・国内事業課長(教育プログラム・
那須セミナーハウス主事)

ルイバ・ヴェロ 募金・国内事業課(那須セミナーハウス補佐・管理人)
中山 紀子 募金・国内事業課(広報・教育プログラム)
佐藤 裕美 募金・国内事業課(販売・広報)
福島 昌代 募金・国内事業課(食品加工)
テラ・ロプレステイ(〜12月) 募金・国内事業課(支援者サポート)
江村 悠子(2021年3月~) 募金・国内事業課(支援者サポート)

業務委託

藤嶋 トーマス 逸生 ブランディング、ID システムデザイナー、
メディアデザイナー
八木沢 淳 メディアデザイナー、印刷物編集

ボランティア

通いボランティア

フードライフ課(農場):茶園いずみ、林 哲、西村 勉、関口 アキ
フードライフ課(給食):東 千尋、木村 裕子、鈴木 由美、高村 京子、林 美智子、
村山 佳奈子
募金・国内事業課(販売):猪股 美恵、柏谷 重明、杉田 万由子、堀内 紀江、三宅 隆史
総務課(営繕):清水 益夫(兼農場)、伏見 卓

バクレルセンター(放射能測定室)

阿久津 隆、高嶋 幸雄、西川 峰城、早坂 孝行、藤本 渉平(兼販売)

長期滞在ボランティア

教務課(学生募集):マリア・アビガイル・ヘルナンデス
教務課(共同体生活):ユロン・ワン(兼学生募集・給食)
フードライフ課(農場):小野 颯太、金井 美紀、陳野 にご(兼給食)、
鈴木 千尋(兼販売)、田中 瑛子(兼国内事業課)、田中 里奈(兼卒業生アウトリーチ)、
武 真人、ドナ・ポーチニョス(兼共同体生活)
フードライフ課(給食):阿部 奈津(兼農場)、岡田 英里(兼農場)、
カニー・スティール(兼共同体生活)、ライサ・アマリス・ヒンリヒス(兼農場)、
山口 晴香(兼農場)、渡邊 桃子(兼 PR)
国際関係課:エミリー・ボーデル(兼学生募集)、ケイトリン・オクイン、篠田 快、
ジュディ・カール(兼共同体生活・販売)
総務課:江村 悠子(兼農場)
卒業生アウトリーチ:芳野 貴洋(兼 PR)



2020年度 卒業生 ≡≡

農村開発科

- インド (1) ショータイ・ドーソ (グレースホーム・クックノ)
 インドネシア (2) オーガスティヌス・アディル (ムバタ聖テレサ教区教会)
 ベトナム (3) タン・ティ・ピック・トラン (ジー・ザット・ドゥーオーング・ベトナム)
 ケニア (4) セレスティン・ンデムバ・ミツァンゼ (参加型開発研修所)
 (5) マーティン・ギクンダ・キリギア (ケニアメソジスト教会)
 (6) ムワリム・シェヘ・ムズング (マガリニ子供センター有機農場)
 ガーナ (7) ジョシュア・オフォリ・スタ (ガーナ長老教会)
 ルワンダ (8) サイダティ・ムロルンクウェレ (ドゥファタニエ (「共に育つ」の意))
 日本 (9) 木村 勇太
 (10) 小松原 啓加

研究科

- 日本 (11) 眞木 凌 (2019年度アジア学院卒業生)

みなさまの開発途上国に対する思いを
アジア学院に託してください

アジア学院で学んだ卒業生たちが自らの
手で、公正かつ平和で健全なコミュニ
ティを作っていきます。

>> 郵便振替

振込口座：郵便振替 00340-8-8758
 口座名義：学校法人 アジア学院

>> ゆうちょ銀行

記号：10700 番号：8002711
 口座名義：学校法人アジア学院

>> 足利銀行

支店名：西那須野支店
 口座番号：(普通預金) 112403
 口座名義：学校法人 アジア学院

クレジットカード・その他
 の寄付については：

www.ari-edu.org/donate/

ご支援
 ください!